395
講談社現代新書

日本の古典 5

近代文学の誕生

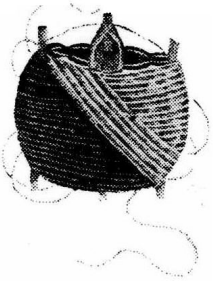
越智治雄

近代文学は、維新とともに一気に生まれたわけではない。
幕末から明治前半にかけての転換期、
日本文学は〈古典〉をうけつぎながら
〈西洋〉を受容するという
かつてない試練にたちむかった。戯作も、怪談噺も、
政治文学も、英雄譚も、等しく試練のうちにあった。
さまざまな試行錯誤があり、さまざまな論争もあった。
豊富なエピソードと珍しい資料を駆使して、
過渡期の諸相をあざやかに描きだしたユニークな論考。

近代文学の誕生 日本の古典⑤
昭和五〇年九月二八日第一刷発行
著者——越智治雄
©Haruo Ochi 1975 Printed in Japan
発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—二一—二一　郵便番号一二一　電話〇三—九四五—一二一　振替東京三九三〇
装幀者——杉浦康平＋海保透
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
●—定価はカバーに表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学1）

近代文学の誕生

日本の古典 ⑤



越智治雄

講談社現代新書

目次

第1章—二つの極——7
1—二つの原風景 8
2—庶民の西洋 12
3—幕末の洋学者たち 30
4—美意識と近代 38
第2章—古典の再生——49
1—物語の継承 50
2—物語作者の基盤 64
3—物語作者と近代 76
4—古典の新生 88

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertor

第3章—政治と文学——95
1—政治と文学の端緒 96
2—政治小説の流域 100
3—政治小説の諸相 122
第4章—さまざまな主人公たち——137
1—行動する人間像 138
2—個人と社会 143
3—認識の闇 155
4—仮面と素顔 166
第5章—論争の季節——177
1—失われた英雄 178
2—交錯する論争 188

3―文学への問い　200
あとがき――212
年表――216
索引――222

所蔵および写真提供

東京大学明治新聞雑誌文庫――17・95・137・177・185ページ
国立国会図書館――20・141・198ページ
東京都立中央図書館――7・37ページ
早稲田大学演劇博物館――119ページ
麻生芳伸氏――66ページ

第1章——二つの極

ナポレオン〈安政四年刊の小関三英『那波列翁伝』さし絵から〉

1——二つの原風景

ある風景　私たちはどのようにして過去の歴史の時間の中に入ってゆくことができるのだろう。早い話が、敗戦の日に始まる数年の戦後の時間にしても、それは確かに体験した時間であるのに、いざ語ろうとすればどれほどの手ごたえをもって蘇らせうるかおぼつかないところがある。むしろ私には、接して心にとどめた文学作品の中の風景の方が鮮やかに歴史を想起させてくれるようだ。水上勉は、「じじい」と共に、病人を乗せたリヤカーを引いて、小浜の町へ峠を越している最中が、のちに知った敗戦が告げられた時間に当たり、そのとき海はきれいだったと言い、その心に残る風景が歴史だと語っている。私にもまたそのような風景はあり、それは必ずしも実際に見たものだけにとどまっていない。そんな風景のことから始めることにしたい。

宮本百合子が昭和二十一(一九四六)年に発表した『播州平野』は次のように始まっている。

一九四五年八月十五日の日暮れ、妻の小枝が、古びた柱時計の懸つてゐる茶の間の台の上

に、大家内の夕飯の皿をならべながら、

「父さん、どうしませう」

ときいた。

「電気、今夜はもういいんぢやないかしら、明るくしても――」（他の引用との関連でここでは旧表記の河出書房版『宮本百合子全集』から引用する、なお初出誌とは冒頭に異同がある――筆者）

作者自身と考えてよい女主人公ひろ子は、安達太郎連山の見える弟夫妻の住む東北に身を寄せているのだが、彼女の地理的な移動に応じてその目に映る、敗戦の日から秋までのおよそ二ヵ月に及ぶ時間は、単に宮本百合子の固有の体験ではなく、私たちの多くの体験と重なってくるものが多い。ひろ子の夫重吉は治安維持法による無期の判決によってすでに十二年の間獄中にあり、ひろ子自身も、もう五年にわたって小説を発表することを禁じられていて、二人の連絡は検閲のある千通あまりの手紙によるしかないといった事情は、むろん戦時の中学生には知らされているはずがなかった。まして、彼女が抑圧された表現の欲求を、ひたすら重吉に送るその手紙に傾注して、手紙を書きつづけたことの意味の重さはまだ分かっていない。

にもかかわらず、作品を貫いている、ひろ子が遠く網走にあって不在の夫との間にかわしている思いは明らかに感じとれたし、何よりも私自身が実際に目にしたことと重なる敗戦直後の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

光景をいくつもここに見いだすことができた。確かに、作中の若いアメリカの将校が言うように、「日本人は破産してゐる」とみてよかったのかもしれない。戦争の災禍は人々の日々の生活にむき出しに作用を現わさずにいない。しかし、最後に、ひろ子が、身を寄せている重吉の故郷の西国の村町から、網走に向かう途中播州平野の光景の中で湧きあがらせている、「日本ぢゆうが、かうして動きつつある」という痛切な感じは、まぎれもない新しい時間、「明日」を告げていた。そしてそれを、私は家々に明るくついた灯のある風景として鮮やかに浮かべることができる。

いま一つの風景　けれどもまた私の内部には違った風景もある。昭和二十四年から二十五年にかけてのおよそ一年間という時期設定で、五年にわたって書き継がれた川端康成の『山の音』の主人公尾形信吾は、戦争によって生命を圧殺されてそれを奪還しえていない、戦争の傷をのこした六十余歳の人物である。ある夜、信吾は山の音を聞く。

八月の十日前だが、虫が鳴いてゐる。

木の葉から木の葉へ夜露の落ちるらしい音も聞える。

さうして、ふと信吾に山の音が聞えた。

風はない。月は満月に近く明るいが、しめつぽい夜気で、小山の上を描く木々の輪郭はぼ

やけてゐる。しかし風に動いてはゐない。

（中略）

音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそはれた。死期を告知されたのではないかと寒けがした。

川端康成は夜の深さを「深さが横向けに遠くへ感じられる」と暗示的な描写で表わしているが、月光に照らし出されたこの空間は、背後にひかえた動かぬ暗い壁のような小山を一層印象づけていて、いわば戦争で死んでしまった男である信吾の内面と見合っている。

信吾の周囲の人物にも戦争は影を落とさずにはいない。心の負傷兵である息子の修一。戦争で夫や婚約者を失った女性たち。妻の夢に現われる故郷信州のぼろぼろになった廃屋もまた戦争の傷痕の暗喩とみることもできるだろう。信吾が車中で目にする、土色の顔をした男娼と、「外国に来てその国の青年をしたがへてゐる」外国人のいる情景にしても、彼らを眺める信吾の視線に投影しているのは、作者の戦後に対する批評である。毛だらけの腕、腕のしみ、のど首の皺、出張った腹といった巨大な怪獣を思わせる外貌が、その外国人が信吾とほぼ同年輩であるだけに信吾に醜悪の思いをきわだたせていて、彼は「青年が遠からず死ぬやうな気」にとらえられずにはいられない。信吾の内部に依然として潜んでいるのはあの死の告知を聞いた夜

景なのである。むろん、信吾にも再生への志向はあるのだが、潜かに思いを寄せる嫁の菊子を、かつて思慕しながら結ばれずに終わった妻の姉のイメージとつながる、故郷の紅葉の風景の中に立たせたいという願いは果たされない。川端はその美しい終局をついに書くことがなかった。信吾が友人とかわす対話の中の「僕らも夜明けを待つたが……」という言葉が端的に示すように、夜はまだ明けていない。

二つの風景はあまりにも対照的だが、そのどちらもが確かに私の中の風景である。人の心の歴史はこのように表裏する風景を含み込んでいて不思議はないのだし、一般に歴史そのものがそうした多層性から成り立っているのに違いない。『播州平野』と『山の音』は以下に述べる二つの極と直接の関係はないのだが、私たちはこの多層性を前提として明治初期の時間の中に入ってゆくことにしよう。

2——庶民の西洋

日本におけるナポレオン

明治期に入ってからの代表的な戯作者は仮名垣魯文である。戯作類を耽読する少年期を送った坪内逍遙が弟子入りを夢想したのも魯文だった。彼を一つの極としてその系脈をも合わせたどってみたい。

魯文に、あまり人の顧みようとしない『倭国字西洋文庫』（明治五、一八七二）、「那勃列翁一代記」がある。『倭国字西洋文庫』は海外の諸人物をつづけてとり挙げる予定があったらしいのだが、ナポレオン一代記しか日の目を見ず、しかも未完に終わった。この書で魯文が「一世ナポレオンの一代記すでに世に流布することひさし」と断っているように、実は日本におけるナポレオンの歴史はそれよりかなり早い（新村出「小関三英の訳書『那波列翁伝』」、『典籍散語』所収、昭和九年三月・小沢栄一『近代日本史学史の研究　幕末編』、昭和四一年三月）。少し回り道になるが、ここでナポレオンがどのような文脈のもとに日本で受け入れられてきたかを若干の具体的な例でみておくことにしたい。それがおのずから、魯文のナポレオン像の位相を明らかにしてくれるはずだからである。

小関三英は、シーボルト門下の俊才で、洋学弾圧の蛮社の獄がきっかけとなって自決した人だが（今泉源吉『桂川の人々〔続篇〕』によれば、正座して柱によりかかり刺胳針〈静脈を刺して悪血を出す針〉で動脈を刺して死んだと伝えられている）、彼がナポレオンに興味を抱いた理由は定かでな

い。ただ、彼が『那波列翁伝』の訳稿をものした天保八年（一八三七）は大塩平八郎の乱があった年で、その以前に幕府が外国船打払令を出してもいるから、幕藩体制が内外ともに大きくゆすぶられている時期だったことを考えぬわけにはゆかぬだろう。三英が拠ったというリンデンの書物との対比ができればもっとはっきりするだろうが、たとえば、若いナポレオンが、「迂遠ノ学」ヲ斥け「実事ニ施ント」したといったエピソード一つにも、彼の共感が推測できるようである。天保二年の渡辺崋山の日記には、「其理ヲ窮メ其源ヲ推ス」（原漢文）西洋医学の方法が、天文、地理、本草から政治や画業にまで及ぶことを三英から聞かされた崋山の感動がいきいきとしるされている。合理的、実際的な思考方法は、おそらく西洋が三英を動かすことになった大きな要因であったに違いない。

『那波列翁伝』にはまた、「ウィルレム・テル」を観劇した青年ナポレオンが劇中の「フレイヘイド」（自由）の叫びに唱和したことがしるされていて、この自由という語について「敵国ニ打勝テ不羈ノ国トナリタルヲ祝スルノ辞」と注記されているが、ナポレオンにはフランスの支配を脱して「本国『コルシカ』島ヲ以テ不羈ノ国ト為ン大望」があったというとき、三英の内部に自由独立といった観念に通ずるものが何ほどかはすでに把握されていたと考えることも可能だろう。

この『那波列翁伝』が広く知られるに至ったのは、松岡台川が安政四年（一八五七）に刊行してからだが、その台川の附言には、対外情勢の緊迫しているとき、「彼の軍の情を知り彼の軍の法を取り彼が軍の器を用て我が武威を増んには、其原づける時の戦ひ其称ふる人の軍の趣を知り心得るこそ先なるべけれ」とあって、こうした兵略への関心は、のちに『鏡獅子』や『大森彦七』の作をのこした福地源一郎（桜痴）の『那破倫兵法』（慶応三、一八六七）にも通じてゆく。この訳書に収められている「那波倫第一世紀畧」にはこんな言葉がみえる。

欧ノ諸州政治用兵皆此時ヨリ一変シ今日ノ盛大ニ至ル、文明ヲ助ケ開化ヲ進ムルノ際帝ノ功業多ニアリト云ベシ（傍点筆者）

本文は当然その用兵、兵略の典範の翻訳である。さらに、山県有朋撰、小林雄七郎訳による陸軍省の『拿破崙（第一世）伝』（明一二、一八七九）に至ると、ナポレオンの兵士の勇気を鼓舞する告文には、「勝タズンバ則チ死ノミ」（原漢文）といった漢文訳があてられ、一方、戦略面に関しては付図が別冊で用意されて、きわめて実際的な目的、翻訳の意図が現われてくる。加えて三英訳以来の大丈夫たる者の功名偉業への関心を考えると、ほぼ日本におけるナポレオン像の輪郭が理解できるだろう。総じてその像は実事、実用と結びついたものであった。

こうした文脈の中に、魯文のナポレオンを置いてみるとその特異さはだれの目にも否定でき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton